

一日本女性へ米富豪の友情

沼津市に“愛の病院” 一万ドルの資金を提供

沼津海岸千本松原にほど近い焼跡に、二階建三百坪スマートなクリ

ーム色の病院が建てられている。新しい表札には「芙蓉病院」と日

開院の日も間近い、かつてアメリカに留学した一日本女性へ寄せるアメリカ一老富豪の友情―これは“愛の病院”物語…

◇ ……◇

物語のヒロインは沼津市千本の須田寛作医博(六)の長女で、神戸製鋼社員田子達彦氏(三)の夫人政子さん(三)である、昭和八年同志社女専を出身後、鹿児島県立末吉高女で英語と音楽を教えていたところ、同志社時代の恩師ミス・レントンの推薦で、セントルイスのウイリアム・H・ダンフォース氏の奨学資金(年三百ドル)を得て昭

和十一年に渡米、ケンタッキーのベリア・カレッジ音楽部に入ったダンフォース氏は全米、カナダの各地に工場を持つ朝食用品で有名な食品会社ローランド・プリンナの社長で、ダンフォース財団会長として社会事業に盡している人、ことに国際的な育英事業に力を入れ、現在まで同氏の世話でアメリカに留学した各国の学生は八百名を越えている、現在八十歳の高齢だ、田子夫人もその一人に選ばれ、ケンタッキーで三年の研究の後シカゴのナショナル・カレッジで児童教育を専攻して戦争直前に帰国、領事保育学園(神戸)などでしばらく教壇に立ったのち家庭生活に入った

だが、戦争で夫人の一家にも悲劇がきた、夫人の父は沼津市で有数の病院を経営していたが、空襲で建物を全焼、その夜、夫人は愛する妹三人を一時に失ってしまった、焼跡に仮建築で須田医院が生まれたが、そのバラックで患者に接する父博士の姿をながめるとは耐えられなかった、何とかしてむかしのような病院が再建したい…と政子さんは悩んだ、しかし、それは空想に過ぎなかった
アメリカとの通信ができるようになったとき夫人は留学中の親友たちからの手紙に「いまの私の悲し

さを訴える返事を書いた、何を期待するわけでもなかったが、書く事が慰めなのだった、ところが思いもかけず“夫人がなげいてる”というニュースがダンフォース氏の耳に入り、二十三年一月セントルイスから安否をたずねる手紙が来た、これが夫人の一家にとつて“幸運の手紙”となった、夫人からのくわしい返信に折返して「病院を建てる資金として一万ドル贈ると、夢のような知らせが舞い込んだ、ダンフォース氏にとつては政子さんは単に奨学金を与えただけの一日本女性に過ぎなかったのである

しかもその年の七月にはダンフォース氏から頼まれたと、同志社教育顧問として来日中のミス・シイペリーがわざわざ沼津に現地視察に訪れ、病院再建計画はぐんぐん進められていった
一万ドルの金は総司令部の援助で直接建築資金となった、そして

昨春秋、政子さん親子の夢は実現して懐しい元の敷地に感激のクイ音がひびいた、こうして各科診察室、レントゲン、手術室、研究室に三室の病室と五十床のベッドを備えたアメリカ式病院、財団法人「芙蓉病院」が生まれたのである

田子政子夫人の話 本当に夢のようです、留学中私たちは毎年夏ミシガン湖のほとりでキャンプをしましたが、ダンフォースさんはかならずそこへお出でになつて一しよに生活し、いろいろお話されました、ダンフォースさんはいままも会社の人たちに毎週月曜日にはメッセージを出して、精神的な指導を続けていますが、よく日本訪問のさいの富士山の印象を語り「青年は富士山を見るように高いところを見なさい」と説いていました、病院の名を決めるときにも、土地柄もあるので富士山にちなんで「芙蓉」をとり、ダンフォースさんへの感謝をささげました